

聖丘を望みて

高山しのぶ

いにしへ聖父の睦びし丘
そよふく風もなだらかに
尾崎に咲ける山櫻
散れるを見たまふ。聖父の思ひやも、
あはれ氣高く深かりし。
星も移りて月も亦。變り行くなる春と秋
偲ぶに充てるよしがなり
學びのはやし文の窓
我はたのしくひもときし
思出多きわが机
別れてわれは塵の里
過ぎにし、五とせ、
おゝ沅湘のごと時は流れ逝き
返さんすべもならなくに
願望の巷に低徊し思ひはいと痛まれて
落涙はせきあへず
胸に秘めてたゞ一言
聖父の膝にすがりつき

安からしめよと祈るわれ

編輯の後に

大正十二年は如何に忘れやうとしても忘れる事の出来なない深い印象を吾人の腦裏に刻み込んだ年であつた。そして其の印象は永久に吾人の意識中に把住せられ常恒に識鬪の上下に浮沈して再生せずには居ない。

五十年以來我國民が熱血を搾り東西文明の粹を集めて建設した華やかな帝都、それが一朝一夕にして往昔の武藏野に歸らうとは吾人の想像でも許さぬ所で有つた、吾人々類に取つて是程の無常是程の凄慘が復とあらうか。昨日迄晝を欺く銀座の街頭に文明の酒を漁りつつ戯れ廻つてゐた人々が、今日は鳥一つだも飛ばぬ廢墟に親子兄弟の白骨を踏みしめながら悲嘆の涙に日を送らねばならぬ身の上となつた、人生に取つて是程の悲痛是程の酸鼻が復と有らうか。薄紙一枚を距てた外、現在の瞬間を隔てた後は全く闇黒の世界として永久に不可知界である淺ましい人間、それが、どうして大自然に對抗し大自然を制服

し得やう。

ルネッサンスの文明は確かに人類の文化生活への源泉で有つた又それと同時に文化生活への魔障で有り自殺者で有つた事を忘れてはならぬ、何となればその純理論的傾向はやがて精神的文化の産物たる宗教や道徳を輕視せんとする勢を示したからである、此の傾向を繼承して一大物質文明を築きあげその潮流は滔々として止まる處を知らなかつた、そして精神的文化は恰もグアジャナの伏流の如く其の影を隠してしまつた、之が現代の文化である。現代に於ける燦然たる物質文明の前には何人も眩惑せざるを得ない、何人も之を稱讚せざるを得ない、然しながら識者は果して是を以て眞の文化であるとするか。

開國以來井中の蛙同様に殆ど泰西の文明から隔絶されてゐた日本國民が一旦その井中を脱して外界に放たれた時、その觀境の廣大な事と外界の種々相とに眩惑させられてしまつた。そしてその瞬間自己自身に對する空虚と侮蔑と彼等に對する羨望と模倣とがその意を占領してしまつた。かくして彼等の畸形的文化の毒牙に依つて我國民 苛まれた。

常に飽魚の肆に在るものはその臭を知らない様に

我國民は此の畸形的文化に對する理性的批判さへも知らなかつた程心酔しきつた。彼を謳歌する聲と此を罵倒する聲とは都鄙の區別なく何所にでも聞く事が出来た。そして吾々の祖先が心血を注いで永き年月の間に築きあげ後昆に残して呉れた國粹は彼等の毒牙の放縱的蠶食に委かす事となつた。開國以來の我特有な世界に誇るべき精神文化は全く其の根底から覆されてしまつた。その結果は黃金萬能主義、物質偏重主義、個人主義、利己主義等が之に代り人々は益々深い迷夢の中に閉された。

世界に歴史有つて以來未だ嘗て經驗した事のない凄慘、悲痛、淒鼻、それは確かに吾人が過去數十年の長き迷夢を覺醒せしむべき大自然の鐵槌で有つたに相違ない。

百數十億の財産と十數萬の同胞とを犠牲にして贏ち得た吾人の貴い經驗は果して何で有つたか、それは物質萬能と云ふ信仰を破つてより以上に尊い精神的文化の存する事、個人主義、利己主義の非を悟つて人類相愛、相互扶助のより貴い事を痛切に體驗した事で有つた莫大な財産と無數同胞との犠牲に對する唯一の報償としては、それは餘りに少な過ぎるか

も知れぬ。然し多大な物質的犠牲を拂つて贏ち得た精神的報償が僅少であればある程それは吾人に取つてより貴重なるものである、此の貴重な報償をば吾人は永久に失つてはならぬ。

將來に於ける希望と光明とに充ち満ちた我國民に依つて叫喚と悲嘆との次の瞬間には復興に對する奮闘と努力とが續けられた、今や復興と云ふ言葉は一つの流行語として普ねく天下に用ひられる様になつた、然しながら所謂復興とは何を意味してゐるか、唯一の報償として贏ち得た尊き精神的文明に對する復興をも意味してゐるか。

眼を驚かす様な摩天樓を仰いで人々はその輪奐の美を歎へ之を稱讚する、然し永久に地中に埋もれて此の高樓を支持してゐる基礎を稱讚するものが幾人有る、基礎工事の存しないものは砂上の樓閣に過ぎぬ。精神的復興を忘れた我が復興は又何時しか前者の轍を踏まねばならぬ、吾人は今それを憂へねばならぬ事を悲しむ。

眞の佛子であり如來使である吾人は放縱と安逸の夢から醒めて立正安國の宗謨に基き勇往邁進此の誤まれる國民の思想善導に従事すべき覺悟を持たねば

ならぬ。棲神の發行は吾人の此の尊き使命を果さんがために必要なる布教或は文書傳導に於ける原稿の練磨であり批判である少くとも年に五六回の發行は望ましい事だが現在の貧弱な本會としてはそれは到底許されない。

年に一回の發行それも内容が實に貧弱だ、而も之が閻浮唯一の靈地に在る我宗教學の根本道場、將來我宗の運命更に我國家の運命をも左右すべき青年宗教宗家の集へる學園、それから出する文書の粹を集めたものであると思ふと全く涙ぐましくなる、而もそれが本年大會の決議に依つて數年間その影を潜めねばならぬ悲運に遭遇した、然し是は祖山學院に於ける圖書館設立促進運動の第一歩として本會員の尊き犠牲的義侠心の發露で有つて寧ろ喜ばしい現象である。

本誌の發行に當り教頭富木僧正が特に卷頭言及び祖書感讀隨筆の二文を寄稿下さつた事は深く吾々の光榮とする所である。

發行の遅れた事は吾々怠慢の然らしむる處で有つて幾重にも會員諸君に謝罪せねばならぬ、然し大正十二年度に於ける幹事の改選が幾分遅れた爲め原稿

募集期を逸した事も、又前後通じて五回の募集をしたのにも不拘投稿数の非常に少なかつた事も又確かにその一因である、此は會員諸君の自尊心が深くなつた爲めかも知れぬ、然し吾々は未だ修養の道中に在るのだから、その論説や修辭の完全を期する事は勿論出來ない、唯吾々は現在の吾々としてベストを盡し眞なりと信する處のものを披瀝すればそれで充分なのである、周圍からの批評を恐れて居るやうではその發展は望まれぬ周圍よりの正しき批評それは吾々の大に望む所ではなくてはならぬ、それは寧ろ我々の思想や文章の練磨の砥である。

二三年の後には又此の棲神の復活を見るであらうその時には競つて投稿せられそして此の棲神が内容形式の両面に於て祖山文書の精華として恥かしからぬ迄に發展せん事を祈つて止まぬものである。

(大正十二年六月三十日羽水記)

關西地方修學旅行記

六月三日 晴天 身延出發

白雨一過して蔚蒼たる綠林翠樹は綠愈よ深ふして幽

致清淑涼味掬すべき季に吾祖山の健兒一行五十名は小川猪口兩教授引率の下に修學旅行の途に就く。午後三時一同精神閣前に集合し法味を獻じ道中の無事を祈り教頭猥下の訓示あり殘留生一同に見送られて身延驛に向ふ。午後五時身延驛を發し愈よ車上の人となつた一行は、窓外に展開されて行く自然の美、殊に夕靄にかゝりて雲表に聳ゆる富士山の雄大さと水聲潺々として流るゝ富士川との天然の風景を稱しつゝ程なく富士驛にて東海道線に乗り換へ靜岡着、時に午後九時四十分なりき。

六月四日 晴天 伊勢より奈良へ

午前二時十五分靜岡を發す、闇を破る音響と共に列車は進行する、多くの旅客の中には肱枕にて眠る者、談笑する者千姿萬態なり、朝七時名古屋に着更に參宮線にて山田驛着、驛頭に玄題旗を樹て、我等旅行隊を歓迎せるあり、是れ山田市常明寺の大橋憲孝師及び其の信徒諸士なり、一行は歡迎者一同の案内に依つて常明寺に入る、當寺は聖祖嘗て伊勢大廟に三大誓願を奏言し給ひし靈蹟なり、寶物等を拜觀し尙晝食の饗應を受け正午大橋師の同道にて外宮に向ふ。外宮に詣ずる幾多の人々は何れも神境の靜寂な